



Title	现代汉语“就是”及其相关构式的多维度研究
Author(s)	申, 慧敏
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/96177">https://hdl.handle.net/11094/96177</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 論文内容の要旨

氏名（申慧敏）	
論文題名	現代汉语“就是”及其相关构式的多维度研究 (現代中国語における“就是”及びそれに関わる構文の多角的研究)
論文内容の要旨	
<p>現代中国語における“就是”は使用頻度が高く、意味・機能が複雑な多機能構造の一つである。また、“就是”は中国語教育における重点かつ難点でもある。これまでの“就是”に関する先行研究では、主に“就是”における通時的な意味変化または“就是”に関する一つの構文の統語論的特徴や意味論的特徴などについて論じられてきたが、体系的に“就是”とそれに関わる構文の意味的な関連性についてはあまり触られていない。本研究では構文文法の基本的な観点を通して、文法化または語彙化などの理論を用い、共時的な視点から“就是”的意味・機能及びそれに関わる構文に対して分析を行った。まず、“就是”とそれに関わる各構文の関連性を示した（第3章）うえで、“不是X就是Y” “就是X也Y” “S就是了”という三つの構文の機能を統語論、意味論および語用論の角度から議論を進めた（第4-6章）。また、中国語教育の面においては、日本語を母語とする学習者に見られる典型的な誤用例を類型化し、誤用の原因を明らかにすることで、“就是”及びそれに関する構文の教育案を提示した（第7章）。</p> <p>本論文は全8章で構成されており、各章の概要は以下の通りである。</p> <p>第1章では、問題意識および“就” “副詞十是” “就是”に関わる先行研究を踏まえ、研究対象と研究目標を述べた。また、研究方法と例文の出典についても明記した。</p> <p>第2章では、本研究で用いられた構文文法に関わる基本的な観点を概観し、文法化、語彙化などとの関連に合理的な説明を与えた。</p> <p>第3章では、“就是”構造に対して、統語論、意味論または語用論という三つの角度から分析を行った。まず、“就是”的統語論的特徴に注目し、“就是”はクロスレイヤー構造として使われている一方、フレーズまたは語彙としても使うことが可能であることを明らかにした上で、“就”と“是”を組み合わせる条件を考察した。また、“就是”的共時的な意味変化に着目し、“Q就是P”と“不是X就是Y” “就是X也Y”及び“S就是了”という三つの構文における意味的な関連性を提示した。さらに、“Q就是P”構文に焦点をあて、“就是”を使用している文には「限定」を表し顕在化されているマークが存在することを示し、構文全体は「断言を強める」「婉曲に提案・請求・承諾する」「軽蔑する・貶す」または「理由と目的を取り立てる」などの語用的な機能を持っていることを明らかにした。</p> <p>第4章では“不是X就是Y”構文に着目し、この構文の意味論的特徴、構文の発展経路および構文の語用論的機能について分析をした。まず、XとYの属性関係により、構文の意味は「極端例並列（I式）」「極端例択一（II式）」</p>	

「典型例統括（III式）」または「多項例択一（IV式）」という四つの意味に分けられることを明らかにした。また、II式とIV式は「推測性選択」という意味通性を持っている一方、I式とIII式は「並列共存」という意味通性を持っていることを実例で裏付けた。そのうえで、「否定意味の一般化」というメカニズムと「主観化」という動機づけにより、「不是X就是Y」構文は「判断→推測性選択→並列共存→唯一性」という意味変化の経路を有することを提示した。さらに、この構文の「反予期」の語用機能を明らかに分析し、具体的な文脈では話者の「仕方無い」「不満」または「提案」の気持ちを表すことを論証した。

第5章では“就是X也Y”構文について考察した。まず、讓歩仮定文で用いられている“就是”と“即使”的異同に注目し、“就是”的統語論的機能を確認した。次に、「讓歩」を表す“就是”と「限定」を表す“就”との意味上の共通性を分析した。その上で、「尺度モデル（scalar model）」という認知言語学の理論を用い、“连X都/也Y”構文と比較し、“就是X也Y”的尺度を表す意味特徴と語用的な機能を明らかにした。つまり、この構文は「もしXにYという結果が出現すれば、 $X \rightarrow X_i$ および $X_i$ より上または下の構成員にはYの結果が出る可能性が更に高い」の意味を持っているほか、「主觀性」により、「評価」「決心・意図」「勧誘」などの語用特徴がある。

第6章では“S就是了”構文における“就是”的文法化経路および動機づけについて分析した。共時的な文法化の角度から見ると、この構文は“S就是了<sub>現</sub>”と“S就是了<sub>仮</sub>”という二種類に分けられる。“S就是了<sub>現</sub>”のSは「現実性」の意味特徴を表し、“就是”は「補足注釈」と「後節重点型」を表す接続成分“就是”から文法化されたものである。その一方、“S就是了<sub>仮</sub>”のSは「非現実性」の意味特徴を表し、“就是”は仮定条件複文の後節“就+是”から語彙化されたものである。二種類の“S就是了”において、それぞれの文法化経路は異なるが、文法化の動機づけは一致しており、双方「間主觀性（inter-subjectivity）」を表すと考えられる。

第7章では、中国語教育の視点から“就是”及びそれに関する構文の教育実態を考察した。筆者はHSK動態作文コーパスを通じ、日本語を母語とする中国語学習者から見られる“就是”に関する誤用例を類型化したうえで、「母語による負の転移」「目的語知識による負の転移」及び「学習環境からの影響」という三つの面から誤用分析を行った。そして、日本の中国語教育を客観的な背景とし、「背景の優位性を重視するべき」「文体教育を重視するべき」と「練習問題を最適化するべき」などの教育案を提示した。

第8章では、本研究を通じて得られた新たな成果を総括し、本研究で扱いきれなかった韻律またはアクセントの特徴、“是”的省略、および“就是”が他の副詞と共に起する時の語順等複数の問題を今後の課題として提示した。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏名(申慧敏)		
	(職)	氏名
論文審査担当者	主査 教授	古川 裕
	副査 教授	林 初梅
	副査 准教授	中田聰美
	副査 特任講師	李 佳

## 論文審査の結果の要旨

現代中国語の“就是”は常用の多機能構造であり、語としては形態論、フレーズとしては構文論という両面で論じる必要がある上に、中国語教育においても重点かつ難点である。《現代汉语“就是”及其相关构式的多维度研究》（『現代中国語における“就是”及びそれに関わる構文の多角的研究』）と題する本論文は、“就是”によって構成される三種類の構文に焦点を当て、構文文法の観点から構造・意味・語用に関する多角的分析を行い、学習者が産出する誤用例を参照しながら日本語母語話者に対する中国語教育に応用するための検討と提言を行った論文である。

本論文は以下の八章から成る。

第一章では、“就是”に関係する問題点を示し、先行研究を概観したうえで、本研究の対象・方法・目的を述べている。

第二章では、本研究が理論的に依拠する構文文法、文法化、語彙化などの概念を検討している。

第三章では、現代中国語の“就是”は語法（“词法”語構成レベル）と文法（“句法”文構成レベル）の相異なるレベルに跨っており、語としての“就是”とフレーズとしての“就+是”が認められ、両者の間に連続性があることを確認し、“就是”的な意味と用法のネットワークを図示している。

第四章では、“不是X就是Y”構文を取り上げ、この構文の意味的な特徴とその発展経路、語用論的な機能について考察している。ここでは、XとYの属性関係によって、構文の意味が「推測性選択」の2類と「並列共存」の2類に分けられるとし、否定意味の一般化と主觀化に動機づけられて「判断→推測性選択→並列共存→唯一性」という意味変化の経路が生じると主張している。

第五章では、讓歩仮定文となる“就是X也Y”構文を取り上げ、認知言語学の尺度モデルを援用して、この構文が持つ意味的な特徴「たとえXであってもY」が生じるメカニズムを解釈している。

第六章では、“S就是了”構文における“就是”的文法化経路とその動機づけを分析している。この構文は、現実性の意味特徴を持つ“S就是了<sub>R</sub>”と非現実性の意味特徴を持つ“S就是了<sub>I</sub>”に分けられるとし、両者は異なる経路を経て文法化した結果であると述べている。

第七章では、中国語教育の角度から“就是”及びそれに関連する諸構文の教育実態についてHSK動態作文コーパスから収集した日本人学習者の“就是”的誤用例を分析しながら考察している。ここでは、口語と書面語という文体を重視すべきこと、練習問題を最適化すべきことなどを提案している。

第八章では、本研究の考察で得られた成果を総括し、今後の研究に残された課題として韻律・アクセントなど音声面の考察、“是”的省略、“就是”と他の副詞の共起関係などを挙げている。

従来は通時的な変遷や单一の構文で分析されることが多かった“就是”について、本論文は現代中国語という共時面での“就是”が見せる多機能性を体系的に論じた挑戦的な好論文である。学習者の誤用例分析を更に発展させられる可能性があり、今後の研究に残された課題も多いが、本論文が論じた“就是”と関連する構文の体系性について一定の説得力をもった分析と解釈を提示できている点は評価できる。

これらのこととを総合的に判断し、本審査委員会は全員一致で、本論文が博士（言語文化学）学位を得るためにふさわしい論文であると判断した。